

日本社会福祉教育学会

NEWS LETTER NO. 18

Japanese Society of Social Welfare Education

事務局 〒270-0198 千葉県流山市駒木 474 江戸川大学総合福祉専門学校 原田聖子 研究室

Tel. 04-7136-1019 E-mail info@jsswe.org <http://jsswe.org/>

2013年7月5日発行

1. 巻頭言「教員の学びの活動」

理事 保正友子（立正大学）

2007年の「社会福祉士法及び介護福祉士法」改正により、社会福祉士養成の新カリキュラムが実施されました。それに伴い、相談援助演習の時間数は120時間から150時間に変更となり、教える項目が増えました。また、演習の1クラスの員数や担当教員の要件も定められました。このことは、均質で充実した演習教育ができる基盤を作ったこととして評価できます。

しかしながら一方で、様々な状況にある学生が増え学習ニーズが多様化しているのも事実です。なかなか凝集性の高い演習クラスにならなかつたり、演習課題に消極的な学生や、個別の配慮が必要な学生も増えてきています。そして法改正の影響で、初めて演習教育に携わる教員も増えました。私は社団法人日本社会福祉士養成校協会の教員研修講師として、ここ数年間、演習教育教授法を伝える立場に関わっており、そこでは初期の頃と現在の研修受講者の層の違いを感じています。現在は、これからの教員を目指す大学院生や、初めて演習クラスを担当する方が多くなってきています。まさに、演習担当教員の裾野が広がっているということでしょう。このように、演習教育に携わる人が増え、演習教育への理解が浸透することは結構なことではありますが、その反面、一人で抱え込み、演習教育方法に戸惑っている教員も見受けられるようになりました。

大学・養成校の教員は、今や研究だけを行ってればよい時代ではなくなり、多忙な校務や社会的活動を行うかたわら、教育にも力を入れる必要があります。とりわけ、多様化した学生に伝わる教育を行う必要があります。それを支える高度な教授法が求められています。すなわち、教員自身も日々研鑽を積み重ねていかなければなりません。では、どのようにしたら、高度な教授法は身につけられるのでしょうか。もちろん独学が主たる方法だとは思いますが、それ以外の方法もあります。（☞ p.2へ続く）

目 次

1. 巻頭言 保正理事	1	4. この一冊：私が推薦します！	7
2. 2013年度第1回理事会報告 事務局	2	田中秀和	
3. 会員の声 ～私の福祉教育～	4	5. 学会探訪⑦～日本教育医学会～ 宮嶋理事	8
保科寧子、茂大祐、栗山隆、石坂公俊		6. 事務局だより 事務局	10
		7. 投稿・情報提供求む 事務局	12

その一つとして、昨年度、私を含め何人かの教員で「ソーシャルワーク演習研究会」を立ち上げました。研究会では、各人の行っている演習教材を持ち寄り発表し、相互評価を行うことにより、演習教育の質を高めるピアグループとして機能することを目的としています。昨年度は、勤労感謝の日、社会福祉士国家試験の日や年度末の3月31日などに研究会を行いました。「学生が頑張っているのだから我々も頑張ろう」という気持ちで、いつも休日返上で行っています。模擬演習だけでなく、実習教育等で困っていることについても話し合う時間を設けています。

常に移り変わる学生の状況に対して、新しい知識や技術を教えるためには、教員も常に学び続けなければなりません。研究を行い新しい知見を明らかにすると同時に、それを目の前の学生や院生にあわせて伝えていく教育を、車の両輪として実施していくことが、今教員には求められているのでしょうか。私達の活動はほんの一例にすぎませんが、教員の多様な学びの活動が全国各地で展開され、日本社会福祉教育学会がその一翼を担うことができれば素敵なことだと思います。

2. 2013年度第1回理事会報告

日時：2013年4月14日（日）13:00～17:30 会場：大妻女子大学 千代田キャンパス

出席：川廷宗之、杉山克己、志水 幸、高橋信行、保正友子、長崎和則、横山豊治、宮嶋 淳、小嶋章吾

欠席：岡本民夫、小山 隆、川上富雄、福山和女

会長挨拶 重要な内容の会議になるであろう。

協議事項1. 第9回大会に関する運営事項について

事前に大会関係者と打ち合わせしている、大会担当研究担当理事の保正理事が、大会第2報原案をもとに提案説明を行い審議し、以下のとおり決定された。

①自由研究発表は、「教育実践研究」と「教育理論研究」の2つの分科会とし、12本の発表枠があるので、参加者を募るよう理事からも働きかけをする。また、参加者および座長の投票で表彰し賞品を贈る。賞品は会長担当。投票の際、座長は参加者の5倍程度の重み付けする。受賞者をホームページで公表。受賞者は表彰歴に記入できるものとする。（その場での投票重視で、余り細かな基準等は設けない。）（最終的には時間を調整し3室を用意することになった。）

②ワークショップは、学生参加型の授業と統計処理。時間は2時間なので、基本的なことを話せる講師がほしい。もし、申出がない場合、2つのワークショップの準備をしておく。第1は「講義科目を学生参加型授業として運営するには――ITを使わずに、事前準備にあまり時間をかけずに行う方法――」（担当候補・川廷会長）。「統計調査研究時の統計処理の方法」（担当候補・杉山理事・山下会員）。内容の決定はワークショップの申し込み状況をみながらとする。

③後援については、日本社会福祉教育学校連盟、日本社会福祉士養成校協会、日本精神保健福祉士養成校協会、日本介護福祉教育学会、などに名義後援をお願いし、できれば、情報の転送等をお願いする。なお、時間はかかるが、文部科学省と厚生労働省の後援もお願いする方向。

協議事項2. 第9回大会の内容と今後の取り組みについて

①趣旨と進め方：初めての合宿ということで、参加人数が確保できるよう、理事で割り当てしてみる。

②分散会構成案：会長が「A：基礎分野 B：対象領域論分野 C：方法論分野 D：演習実習分野」の各案を資料により説明し、討議した結果、今回は折衷案で、ABC分野から以下の8科目の分散会とし、参加者に第1希望と第2希望を聞いて振り分けることになった。但し、一つ一つの分散会に5人以上の

メンバーがいないと活発な討議は期待しにくいので、希望者が4人以下の場合はその分散会は他に吸収することになった。

A：基礎分野 B：対象領域論分野 C：方法論分野 D：演習実習分野

No.	分野	科目	担当
1	A	現代社会と福祉	志水理事、横山理事
2	A	社会調査の基礎	高橋理事
3	A	人体の構造と機能及び疾病	杉山副会長
4	B	児童家庭支援と児童家庭福祉制度	宮嶋理事
5	B	精神保健福祉に関する制度とサービス	長崎理事
6	B	権利擁護と成年後見制度	川廷会長
7	C	相談援助の基盤と専門職	小山理事、保正理事
8	C	地域福祉の理論と方法	川上理事

③8月31日14:30～15:45の進め方：「ループブックとは」「この学会で取り組む理由」などの問題提起を行うとともに、まとめ方を川廷会長が説明する。早く終われば、分散会を早く始める。

④分散会：分散会の記録係りは学会誌の担当と同じ。分散会でまとめたループブックは学会誌に掲載していく。分散会の報告集会は、15分×6～8分散会でプレゼンする。分散会で電子白板を使用される場合は事前に申し出てほしい。大会の打ち合わせを大会前までに、もう一度行いたい。分散会の進め方については改めて再度連絡する。

⑤第2日目のスケジュール変更：自由研究発表は3部屋を使用することにし9：00～11：00とし、新たに、分散会（グループセッション、昼食含む）Ⅲを11：15～13：15を入れる。分散会報告集会は13：30～15：00、閉会式を15：00～15：30とし、遠方よりの参加者へ便宜を図る。

⑥ ①～⑤の原案からの変更点は、大会第2報とニュースレター17号に反映させる。

⑦来年以降の進め方：

- 特別予算にて、会員の研究分野だけではなく、担当授業科目などのデータを追加収集する。各科目別の連絡網を創って行く準備である。
- この検討が国家試験問題などの在り方に関連してくるが、様々な利害関係を越えて、社会に貢献しうる科学的な研究として進める。
- 来年度以降は、意図的に、ループブック研究について情報を掲載していく。他学会の動きをどんどん入れていく。
- 社会福祉教育に関する、関連研究団体や、業界団との動向は、川上理事や、保正理事を中心に出来るだけ収集し、NLやMMで会員に流していく。

⑧第10回大会：2014年8月30、31日に仮決定する。場所は霧島のロイヤルホテルを予定(高橋理事)。来年に向けて細かいところをまとめる。参加者は50名くらいで設定する。バス1台程度。

協議事項3. 組織運営事項について

1. 予算執行状況等報告

○2012年度決算案の報告 事務局 小嶋理事より行った。

○入退会の現状報告

- 1) 入会申込：以下2名の入会が承認された。根本曜子氏、福馬健一氏
- 2) 退会希望：以下2名の退会が了承された。Sung Lai Boo氏（米国帰国）、後山恵理子氏
- 3) 自動退会予定者 もう一回、期限付で請求し、支払いなければ、退会処理をする。

2. 学会誌について： 杉山副会長より、学会誌の編集と投稿規程の変更ポイントを以下の内容で説明された。次の理事会で決定し、2014年3月末から運用したい。

- ①査読委員を委嘱できるのは、入会時「准教授相当」ではどうか。投稿規程 8 の贈呈は掲載誌 3 部とする。
- ②投稿規程 2 に、「総説」を入れてはどうか。総説とはレビューのこと。資料紹介ではなく「資料解説」としてはどうか。次号くらいから、お願いして書いてもらい掲載すると、説明になるのではないか。
- ③査読原稿と依頼の区別。調査報告までが自由投稿、資料紹介以降は依頼。
- ④規定の改廃は理事会とするかどうかは規約で確認する。夏の総会で決定する。
- ⑤学会誌は PDF 化して、ホームページ上に掲載する。著者に確認したのちに作業する。これに伴って在庫を保存しておく必要性が減少する。
- ⑥在庫になっている学会誌をどうするか。啓発で他団体へ送付してはどうか、福祉系大学の図書館に置いてもらうか、国会図書館に置いてもらうよう、申請する(川廷研究室・三輪)など色々な案はあったが、最終的に次のとおり決定。
 - *当面、テーマ一覧をつけてニュースに掲載して着払いで送る・頒布価格は、会員外は 1 冊 500 円(会員は送料のみ)とする。
 - *第 9 回大会参加者には欲しい人に無償配布する。
 - *その後、時期を見て保存版を各号 10 冊程度残し、他は廃棄する。

3. ニュースレターについて： 17 号は 4 月 18 日発送。18 号は 7 月上旬。

4. 研究について

- ①**来年の春季研究集会：** 課題研究の報告とリンクしない。開発教育の田中治彦先生に開発教育の後援をお願いする。開発教育のターゲットは主に海外の福祉問題解決であるが、其の内容や方法は内でも使える。午前中、田中先生の講演をお願いし、午後のプログラムは、今後検討とする。担当理事の志水理事が夏の大会までに連絡し、午後の内容については第 9 回大会後に決定する。色々な案があり得る。なお、当面、学会指定研究の報告はない(夏の大会および、学会誌で報告) 予定。
- ②**学会指定研究：** 国際比較研究は 2014 年の夏を目指す。IT は「検討中」とする。期間は 2014~2016 で残す。ロボット研究はどうか。学会指定研究のテーマ 2 (高橋理事担当) については、柿本会員が九州看護大をやめられたため一部調整中。4 月末がとりあえずの締め切り。寫末会員の論文が 1 本。もう一人依頼できる人をなんとかしたい。評価研究は 2013 年度をスタート年次に改める。

5. 広報宣伝 長崎理事と事務局とで調整して行う。

3. 会員の声 ～私の福祉教育～

ソーシャルワークを教えるなかで思うこと

保科寧子 (埼玉県立大学)

現在、勤務校で社会福祉士養成課程におけるソーシャルワーク論 I の講義を担当している。この科目では、個別援助を中心としたソーシャルワークのプロセスや手法・技法について学ぶことが主要な目的となっている。試行錯誤しながらこの講義を行う中で、学生の学習上有効であったと考えられる取り組みをいくつか示したい。

まず、すでに多くの教員の方々が実施していることと思われるが毎講義終了時の感想・質問シートへの記載である。そして学生の記載した感想や質問のうち、全体で共有したほうがよいと思われる内容は、いくつかピックアップして講義の初めに教員からのコメントを返すようにしている。学生と相互にコミュニケーションをとることで、シートを通じた講義への質問も増え、記載されている講義内容への考察が深まってきて

いるように見える。基本的なことであるが、このやり取りの中で学生の講義に参加しているという意識が強まっているようだ。次に講義の中では、講義中に説明した内容を問う問題や課題をできるだけ実施している。自ら考える、実践してみることで初めて知識が身に付き自らの力となると考えている。講義中に実施した課題を確認することでその時点での学生の理解の状況の把握できるので、状況によって講義の難易度を修正していくことができる。

事例を検討する際にも、口頭で事例の内容を伝え学生にメモを取るよう促す。講義は練習の場であるので、聞き取れないときには複数回事例の内容を説明する。事例検討をグループで行う際には、それぞれが聞きとった内容を照合して確認し、議論を行うようにしている。このような形で講義を進める理由は、ソーシャルワークの実践の場では相談者の相談内容をソーシャルワーカーが話を聴きながらメモをとらせていただき、のちに記録にまとめる場合が多いためであると説明する。より実践に即した学びの必要性を学生に伝え、この講義の後に控える実習においても積極的にメモを取り記録にまとめることの大切さを知り、円滑に学習が進むように留意している。

教育も社会福祉現場でのソーシャルワークと同様に、コミュニケーションを通じて相手(学生)を理解し、適切な支援を提供する姿勢が必要であると切に感じている。

大学の福祉教育におけるこれからの課題

茂 大祐

これまで、福祉に携わってきた人間として、2点について述べていきたい。

1点目として、現在の学生の福祉についての意識について考えていきたい。福祉にかかわる人間として感じていることは、「熱い気持ち」を持った学生が少ない傾向にあるように感じている。講義などで、学生とのかわりをもつ中で、意識を高く持ち意欲的な学生があまり多くないと感じている。私も、数十年前、福祉について色々な教員から多くを学んだ。その頃は、介護保険制度が開始し始めたころで、福祉に関して注目されてきた時代であった。その頃と比べると、「何か変わってしまったのではないか」と考える。

当時、大学の時に学んで印象に残っているのが「人とかわる中の支援には、ホットな心とクールな頭が求められる」という言葉である。心は熱く、むしろ感情的に近いくらいの気持ちでかわることが大切であり、一方で、頭についてはその感情的な心をコントロールし、冷静に物事を見極めることが重要であるということである。真意として、両方の「バランス」が重要になってくるということである。しかし現在では、冷静沈着に物事を見つめすぎる学生が多くなっているように感じている。物事を把握して、進めるということに関しては評価しているが、人間味のある感触という点については疑問に感じている。学生だからこそできる、みなぎる力の発揮と爆発するような感情的な気持ちだが、今の彼らには必要ではないかというように考えている。時には、冷静に物事を見るのではなく、少し浮世離れしているかなと思うくらいの奇抜な発想が出てきてもいいのではないかと思う。

2点目として、「障がいを持つ学生への支援について」である。これまで、教育機関で働いてきて、大きな課題であると考えすることは、障がいを持つ方々の支援についてである。特に、私がかかわってきて課題としていることは、発達障がいを持つ学生についてである。実情としては、なかなか分かりにくく、不当な評価を非常に受けやすいパターンが多い。

感情の抑制がうまくいかず、怒ってしまうという事例があった。講義などで分からないことがあるとイライラして人に強い口調であたってしまうということである。色々調べると、一生懸命に理解しようと頑張っているが、何が大切なかが分からなくなってしまうとイライラしてしまい、感情的な言葉を使ってしまったという。

そこで、感情を整理するために、ノートなどに思った感情をとにかく書いてみるように伝えた。勉強のこと、今の気持ち、何でも書くように進めた。その後しばらくして、学生と話をすると、言いたかったことを書くことで、気持ちや学習内容を整理することができたという話であった。その後も、イライラして怒って

くることがたまにあったが、ノートに書くことをすることで怒ることの回数は減少した。

このような事例をはじめとして、内容はそれぞれ異なるが、学習や日常生活するうえで支障を感じている学生も少なくないと考えている。また、発達障がいの可能性のある学生についても、潜在的に多く、いつどのような形で見えてくるかは分からない。できる限り、早期の発見と対応が的確に進むことで、学生の自信向上と不安解消につながり、不登校や退学などのリスクを下げることにつながるのではないかと考えている。

以上2点について、今後の福祉教育において考えながら、理解を深めていくことができればと考えている。

導入教育としての「福祉臨床入門」の意味

栗山 隆（北星学園大学）

北星学園大学社会福祉学部福祉臨床学科 (<http://www.hokusei.ac.jp/SocialWork/index.html>) では、多種多様な現場で必要とされるソーシャルワーカーの養成を目指し、ジェネラリスト・ソーシャルワーカーが備えるべき能力をV群13項目に整理した上で、4年間のカリキュラムを構成している。学科専門科目として福祉臨床基盤科目を1年次から用意しているが、今回は、中村和彦学科長と私の2人で担当している「福祉臨床入門」という科目を紹介する。

大学における学習では、問う(主体的な問題意識の基にテーマを発見する)、読む(リーディング)、調べる(リサーチ)、分析する(アナリシス)、書く(ライティング)、発表する(プレゼンテーション)、討議する(ディスカッション)等のスキルが求められる。

本科目の目的は、「福祉臨床」というキーワードを用いて、福祉臨床領域の導入教育、及び大学において求められる学習スキルの育成をテーマとし、大学における学習とは何か、その学習に必要な基本的なスキルとは何かについて学び、そのスキルの習得を目指すことである。

今年度については、指定テキスト(窪田暁子(2013年)『福祉援助の臨床-共感する他者として-』誠信書房)を活用し、全体像を捉えるための読み方(スキミング)、分析読み(クリティカル・リーディング)したものを整理し、それを題材にグループディスカッションを行う。

その後、発表、レポート提出と続くが、一連の作業プロセスを通して、福祉臨床に関する主要な用語が取りあげられ、また、それについての教員によるフィードバックが交わされる。この繰り返しの中で、学生個々が自分自身の学びを確認し、なおかつ、深め、はじめから知識の詰め込みや正答を求めるのではなく、多様で全体的な視点、自分とは異なった見解を受け止めていく肯定化の過程が目指される。

このような理論的意味付けのプロセスは、学生自身の福祉臨床への接近ということと、自分がみたり、感じたり、考えていること以外の視点に気づくこと、つまりは凶地反転の気づきという状況が、グループメンバーや教員との意見交換などを通して、他者の視点と自分の視点を行き来しつつ、社会福祉学習者としての自己発見をしていく過程となる。

改めて学生の思考を授業の中で表出していくことの意義と、そのための工夫や配慮が必要なこと、その過程の中で、学生が意味付けを進め、深めることに配慮された継続、積み上げ事後学習指導(次年度)の課題がみいだせる。

入門での学びは、「福祉臨床とは何か」を考えるための初めの一步ではあるが、そこに帰ってくる大切な一步であることを意識して今日も2人の掛け合いは続く。

私の福祉教育～相談援助演習～

石坂公俊（高崎健康福祉大学）

現在、勤務先の大学で「低所得者に対する支援と生活保護制度」をはじめ、「相談援助演習」や「相談援助実習指導」などを担当している。駆け出し教員の私にとって、常に模索しながらの授業展開ではあるが、

小稿の依頼を受け、「相談援助演習」の授業、とりわけ本学では相談援助実習を控えた演習授業であり、事例検討を扱うことを主とする「相談援助演習Ⅳ」という授業について筆者なりの実践を述べさせていただく。

周知のようにこれまでの児童・障害・高齢といった対象別の体系にとどまらず、「ホームレス」・「DV」・「外国人」とった総合的かつ包括的な事例がテキストなどには並んでいる。本学では学生の実習先が決定し、複数の教員が同一のテキストを使用し、授業を進めることになっているが、学生の中にはテキストに見られるような多彩なソーシャルワークが実践されている実習先に自分が行くわけではない、施設系での実習が決定おり必ずしもダイナミックなソーシャルワーク実践に触れるわけではないといった認識（大変な誤解）を持つ学生も少なくない。ややもすると主体的に取り組むことに弱い学生が散見できるのである。

そのような中で、至極当然ではあるが「社会福祉士の倫理綱領及び行動規範」を活用し、ソーシャルワークの視点の大切さを理解し、常に意識するよう働きかけ続けているのである。学生には、初回授業で配付し、毎回の授業に必ず持ってくるよう指示する。授業（事例を扱う）の中では、いちいち倫理綱領及び行動規範のどの部分に該当するのか、あるいは複数箇所にもわたって該当するのかといったことを提示し、その取り組みを続けている。授業開始当初は教員からの働きかけがかなり必要であるが、スモールステップで回を重ねていくことで意識化され、毎回の授業後のリアクションペーパーのコメントなどにおいてその効果を実感できることも少なくない。もちろん事例を読むには、背景や課題を分析するための事前の知識や応用力も求められ、それらへの課題も多くある。また教員自身の力量が備わっているのかといった自問もないわけではない。しかしながら、授業を通じて培ったソーシャルワークの視点の意識化が「相談援助実習」へ、実習後の「相談援助演習Ⅴ」へと繋がっていき、学生自身のソーシャルワーカーとしての実践上の価値に繋がっていく、若輩者の筆者のささやかな取り組みである。

4. この一冊：私が推薦します！ 社会福祉専門教育とスクールカースト

鈴木翔・著 解説・本田由紀 『^{スクール}学校カースト』光文社新書.2012.を読んで

田中秀和（国際こども・福祉カレッジ）

筆者は専門学校の教員として日々学生と接しているが、毎年、クラス内において学力とは異なる階層性があることを薄々感じていた。

最近、そうした問題意識に答えてくれる上記の著書を見つけたので、ご紹介させていただきたい。

本書は、学校の教室内における見えない生徒間の権力構造を教育社会学の視点から描き出している良書である。

本書によるとスクールカーストの定義は、2007（平成 19）年に朝日新聞社発行の雑誌『AERA』紙上に初登場した。そこでは、スクールカーストを『主に中学・高校で発生する人気のヒエラルキー（階層制）。俗に「1軍、2軍、3軍」「イケメン、フツメン、キモメン（オタク）』『A、B、C』などと呼ばれるグループにクラスが分断され、グループ間交流がほとんど、行われなくなる現象』と定義づけている。

著者は、中学生、大学生、現役の教師に対するアンケート調査やインタビュー調査を通してスクールカーストの内実を明らかにしようと試みている。

筆者は、幼いころから学校のクラス内における地位関係に関心を抱いていたものの、それを言語的に表現する用語が見つからず、もやもや感が取れなかった。著者の指摘にもあるように文学の世界では、スクールカーストに関する描写は数多く描かれているものの、この問題について、筆者に明確な回答を与えてくれる書物はこれまでなかった。

本書は、このような筆者の疑念に対しても、学術的に回答を用意してくれている。著者が発見したのは、以下の点である。

1. スクールカーストの認識は発達段階により変化する。

2. それぞれのカーストに所属する生徒には特徴がみられる。

3. 生徒はスクールカーストを権力と捉えているが、教師はそれを能力と考えている。

スクールカーストは小学校段階においては個人単位で把握されやすいのに対して、中学以降になるとグループ単位で把握される機会が増加する。また、スクールカースト上位の生徒は、にぎやか、異性にもてる、若者文化へのコミットメントが高い、運動能力が高い等の特徴があり、逆にそれが低い生徒は、地味で特徴がないのがあえて挙げる特徴である。

さらに教師は、スクールカースト上位の生徒を能力の高い生徒であるとの認識をもっていることを本書は示している。この場合の能力とは、本書の解説を務めている本田由紀が提唱したハイパー・メリトクラシーと親和性が高い。スクールカースト上位の生徒は、コミュニケーション能力や人間力に長けた人物であると教師が認識していると本書は指摘する。逆にスクールカーストの低い生徒に対し、教師が抱く印象として、やる気がない、向上心がない、人生損している等の否定的なインタビュー結果を著者は掲載している。本書の結果から言えることは、教師から生徒への理解には偏りが出る可能性があるということであり、教師自身注意すべき部分であろう。教師は意図的に「クラス団結」等の表現を使用し、クラス内をまとめようとするが、そのような言説はスクールカースト上位の生徒のみにしか団結への参加を保障していないことを教師自身が自覚すべきであろう。

スクールカーストは、いじめ問題を直接的に扱った概念ではないが、スクールカーストの低い生徒が、小さな出来事の積み重ねからいじめの標的になる可能性を本書は示している。

今後への課題として、著者も掲げられている通り、スクールカーストは世代間に差があるのかという点は、今後の研究が待たれる。

本書の著者は現在、東京大学大学院教育学研究科博士課程に在籍している大学院生である。著者は1984(昭和59)年生まれで、筆者は1983(昭和58)年生まれである。筆者自身は、上記の通り、幼いころからスクールカーストの存在を認識していたし、発達段階におけるスクールカーストの地位変化も体験している。この体験は筆者や著者の世代にのみ、見られる現象なのだろうか。もしくは、世代を超えて存在するものなのだろうか。

また、スクールカーストの地域差に関しても今後、より検討が必要なテーマであろう。例えば、人口の少ない地域とそれが多地域ではスクールカーストの出現に差が出るのであろうか。筆者自身、スクールカーストの存在=悪であるとは考えないが、過度のスクールカーストは、いじめの温床にもなるため、望ましいとは考えない。スクールカーストの出現を弱めるような方策を発見できれば、いじめの予防にも繋がるのではないか。さらに、スクールカーストの構造を明らかにすることは、学級崩壊の防止やスクールソーシャルワークの発展にも寄与するのではないか。本書は主に、小学校から高校までの発達段階に関心を寄せているが、大学や専門学校もスクールカーストとは無縁ではない。また、われわれ、社会福祉専門教育に携わる者にとっても、スクールカーストは無視できない存在であると考えている。

5. 学会探訪⑦～ [平田式体格体力測定法] の継承：日本教育医学会～

理事 宮嶋 淳 (中部学院大学)

日本教育医学会は、同学会の会則によれば、英名“JSEHS: Japanese Society of Education and Health Science”と称され、教育と健康科学を標榜する学会である。

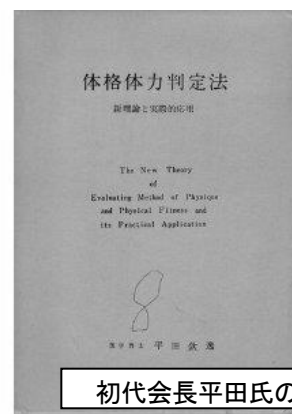
その目的にも「本会はすべての教育の場において医科学的調査研究を行い、その結果に基づいた生涯にわたる国民の健康増進のための具体的対策を樹立し、ひいては人類の福祉に寄与することを目的とする。」が掲げられている。

学会の歴史

日本教育医学会は1953（昭和28）年8月1日、岐阜県美濃市において設立された「体格体力判定法研究会」を前身とする。

その後、1957（昭和32）年の同研究会の第5回大会にて「日本教育医学研究会」と改名し、毎年社会および学校等における住民や児童生徒の健康の保持増進のための理論的研究と実践を目的とし研究会が継続された。さらに1979（昭和54）年に「日本教育医学研究会から日本教育医学会」へと改称し、故平田欽逸博士が初代会長に就任された。翌年には、学会誌『教育医学』はISSNとして認められている。

1982（昭和57）年10月、名古屋市内において第1回の国際会議を開催し、チリ、インド、南アフリカ、台湾、香港、ソ連、ブルガリア、フィンランド、オーストリア、カナダ、アメリカおよび韓国等多数の国の研究者が学会を訪れている。国際会議等により医学者と体育学者との連携が促進された。1985（昭和60）年第33回大会は、初の日本と韓国共同の保健体育シンポジウムの開催となり、以降、2年毎に大会を交互に開催している。



初代会長平田氏の著書

概略

同学会のホームページによれば、会員数は（正会員＝754名、外国会員＝26名、協賛団体…1）となっている。定期刊行物は、『教育医学』（The Journal of Education and Health Science (J. Educ. Health Sci.)）で、年4回発行、1回につき1000部、年785頁になる。近年号の目次をみると、「原著論文：介護保険で要支援と認定された者の転倒予防を目指す介入プログラムの成果と課題について—中国の蒙古族青少年の身長発育における時代的考証—1985年と2005年との比較—」や「資料：中年女性における骨密度(SOS)の加齢変化の評価試案—最小二乗近似法適用による推定—」など、保健・健康分野の論文も目に留まる。学会は、顕彰事業として「日本教育医学会功労賞（創設平成6年）」「日本教育医学会賞（創設平成6年）」「日本教育医学会奨励賞（創設平成6年）」の3つを有している。学術会議登録も行っており、登録No.10402である。

シンボルマーク



同学会は「シンボルマーク」を有し、その意味は次のとおりである。

日本教育医学会の英語表記の各単語の頭文字(JSEHS)と前身の体格 体力判定法研究会が設立された年号(1953)を利用して構成しました。Eは「Education」、Hは「Health」、Sは「Science」を意味しますが、日本教育医学会の役割の1つとして教育(E)の現場と科学(S)の領域との融合が挙げられると考えました。医学をはじめ関連領域において科学的に検証された研究成果を生涯にわたる国民の健康増進のために教育の現場へ還元し活かしていくためには、それを融合させる人「Human」が必要であります。

「Health」の頭文字Hとは別に、もう1つの意味として「Human」の頭文字としてのH（人＝学会員）を加え、教育(E)と科学(S)との間で学会員(H)が懸け橋の役目を担い、将来に向かって日本教育医学会がいつまでも発展していくことを願い、両手を挙げた人型を中央に描いて学会シンボルマークとしました。

学会長インタビュー

Q1. 古田会長の学会との関わり—入会のきっかけ、歴任された役職などを簡単に教えてください。

A1. 私が入会したのは、30年前になります。学会の歴史からみると、ちょうど半分でしょうか。第1回（昭和55年）の国際会議の際、事務局をお手伝いし、それ以降、様々な役割を担い、現在、会長2期目になります。この学会は、平田先生が岐阜県美濃市に研究所を自費で開設されたところから始まります。岐阜県発の研究が全国に広がった画期的なシーンではないでしょうか。

Q2. 設立60年を迎えられた学会の歴史をふり返って、どのような想いを持たれていますか。



古田 善伯 会長
(元岐阜大学副学長、
現中部学院大学学長)

- A 2. 平田先生が提唱される「平田式体格体力測定法」は、発表当時、全国で関心を集め、全国を平田先生が巡回されたと聞いています。その中に、韓国もあり、韓国でかなり広く活用されたようです。
- 平田先生が個人的に親交を深めておいでになった韓国との関係を、学会としても取り組み、2年に1度は日韓共同で学会を開催しています。今年(2013年)は、韓国済州島で開催します。
- Q 3. これまでの学会活動で印象に残っていることを具体的に教えてください。
- A 3. やはり「平田式測定法」と国際会議の開催、そして学会誌の編集でしょうか。学会誌を年4回発行している学会も稀有では。最近、英語の投稿が増えました。また、多領域からの若手の研究者の参画もあり、査読には苦勞しています。
- Q 4. 学会を通して行われた社会貢献、学術貢献にどのようなことが

ありますか。

- A 4. 平田先生の研究は、文部省はもとより、韓国にも影響を与え、コンピュータ化に早くに成功しています。今でも一部の領域で、活用され研究が続いています。
- Q 5. 今後、学会はどのような方針で、何を目指して活動されていくのでしょうか。
- A 5. 会員を1000人にまで増やし、事務局体制を強化したいですね。また、研究活動を推進するために学会顕彰事業を推進しているので、多くの若い研究者が参加してくれることを望んでいます。
- Q 6. 社会福祉教育を担う私たちへのメッセージをいただけますか。
- A 6. 学会活動は、長く続けていくことが大切だと思います。そのためにも「骨を折る人」、つまり、役員や事務局が息長く土台作りをしっかりとされることが大切だと思います。

平田式体格体力測定法・・・昭和25年に体格体力総合判定法として考案され、体格体力の総合判定を〔満年月齢と身長等を標準偏差〕化し判定しようとする方法。主な測定項目は、身長・体重・胸囲・50m走・立ち幅跳び・ソフト投げ。測定の妥当性を科学するため、器具の吟味、測定方法の正確性、判定の合理性、判定結果と事実の一致性を、全国10万件以上のデータから実証。

学会事務局 : 〒501-1193 岐阜県岐阜市柳戸1番1 岐阜大学教育学部保健体育講座内
Tel & Fax 058-293-2285

6. 事務局だより

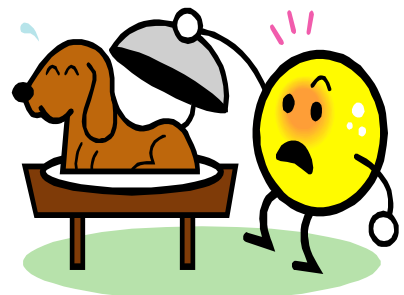
1. 本学会のPRについて、ご協力ください

本学会では、さらなる学会活動の活発化を図るためにも、多くの方に会員になっていただきたいと考えております。皆様のお知り合いの方に、社会福祉教育にご興味をお持ちの方がいらっしゃいましたら、ぜひ、本学会の入会について、ご案内をいただければ幸いです。

また入会の案内(リーフレット)について、レイアウトをリニューアルし、学会ホームページにアップしました。ぜひご活用ください。

2. 本学会のホームページについて

本学会のホームページについて、インターネット上、旧いものと現在のものが混在し、ご迷惑をおかけしております。現時点における



本学会の公式ホームページは次のものとなります。 <http://jsswe.org/index.html>

3. ニュースメール配信中

本学会では、年4回のニュースレターで、会員の皆様に様々な情報をお届けしています。
(この他に年2回の学会誌も)

その上で、本学会での様々な研究活動や、外部からの関連情報もどんどん入ってきていますので、これらの情報をいち早く皆さんにお届けする必要があると考え、ニュースメール配信事業を開始しました。

本学会にご自分のメールアドレスを登録している方には全員、ニュースメールを送信しています。もしも不要であるという方がおられましたら、事務局 (jsswe.bu@gmail.com)までご連絡下さい。逆に、登録していない方で情報を求めている方もご連絡下さい。

なお、このニュースメールの送信を研究情報の交換に使いたいという方も、内容を取りまとめて、事務局にお送り下さい。本学会の活動の趣旨に副うものであれば、対応できるようにさせていただきます

4. 学会誌のバックナンバーを差し上げます

学会誌のバックナンバーを会員の方には無料で頒布をさせていただいております(送料は別途ご相談)。ご希望の方は、事務局までお問い合わせをいただければとお願い申し上げます。

号数	発行年月日	配布	主な内容	主な掲載者<敬称略>
第1号	2007年2月	可能	特集: 創立大会記念シンポジウム報告	宮田和明、米本秀仁、川廷宗之、矢幅清司、牧野忠康、太田義弘 ほか
第2号	2008年3月	可能	特集: シンポジウム報告/社会福祉教育研究の対象と方法、査読論文	米本秀仁、宮田和明、川廷宗之、小山 隆 ほか
第3号	2009年10月	可能	特集: シンポジウム報告/社会福祉「実践力」を目指した社会福祉教育の在り方、査読論文	米本秀仁、川廷宗之、田中千枝子、長崎和則、坪井 真 ほか
第4号	2010年8月	可能	特集: 基調講演およびシンポジウム報告/日本における社会福祉専門職養成教育の「達成課題」、査読論文、研究ノート、実践報告	スン・レイ・ブー、小山 隆、杉山克己、川野 辺裕幸、占部慎一、白澤政和ほか
第5号	2011年3月	可能	第5回大会報告、第6回大会報告、査読論文	米本秀仁、宮田和明、沖 裕貴、藤本元啓、大西次郎、中根 真、越智あゆみ、永野なおみ ほか
第6号	2012年3月	可能	第1回春季研究集会報告、第7回大会報告、調査研究、学会員調査報告—第1報	白澤政和、池田賢市、高橋信行、井上俊也、橋本正明、米本秀仁、高橋福太郎ほか
第7号	2013年1月	可能	第2回春季研究集会報告、学会宿題研究報告1: 初年次教育	米本秀仁、志水 幸、宮嶋 淳、杉山克己、白川 充、宮本雅央、伊藤優子、山下匡将、小関久恵
第8号	2013年3月	可能	特集: 第8回大会報告/社会福祉士養成課程の改正について検証する(1)、論文、実践報告	白澤政和、小山 隆、渡辺裕一、綿 祐二、守本友美、二本柳 覚、越智あゆみ

事務局員紹介

福馬健一(江戸川大学総合福祉専門学校)

はじめまして。この度、本学会事務局のお手伝いをさせていただくことになりました福馬健一です。私事で恐縮ではありますが、教員という役割を担うようになって3年目を迎えました。目の前の出来事に対処するだけで精一杯という駆け出し状態のなか、学生とのやりとりや諸先輩のご指導を受けながら、実践者を育成する役目の重大さとその担い方に悩み、考え、日々奮闘しております。

このような若輩者の上、甚だ微力ではございますが、事務局長の原田聖子先生の下、三輪千加映さんのお力をお借りしながら、学会活動のお手伝いをさせていただければと思っております。何分不慣れということもあり、多々ご迷惑をおかけ致しますが、皆様のご協力を賜りながら、誠実に事務局活動に取り組んで参りたいと存じます。よろしくお願い致します。

7. 投稿・情報提供 求む!

会員の皆様からの学会誌への積極的な投稿を募集しています。投稿原稿は随時受け付けますので、学会事務局(本紙1頁タイトル部分に表記)までご投稿願います。

ニュースレターでは、皆様の社会福祉教育に関する声を募集しています。奮ってご投稿下さい。

今号より「この一冊：私が推薦します!」のコーナーもはじまりました。「えっ!こんな視点が。こんな学問が!」というような感動・感銘を会員の皆さんと共有しませんか。

テーマ：社会福祉教育に関することであればテーマは自由です。

例えば下記のようなテーマがお薦めです。

「社会福祉士のカリキュラムについて」「実習教育について」「福祉分野に行かない学生への対応について」「教科書の使い方について」「お薦めの教材について」「科目毎の教授法について」

締め切り：随時。ニュースレターへの掲載順はこちらにお任せ願います。

字数：800~1,600字程度

送り先：次回ニュースレター第19号担当理事 横山 豊治宛 toyo-y@nuhw.ac.jp

学会探報のコーナーも皆さんが加入しておいでになる、あるいは興味を持っている学会をご紹介頂ければ、編集委員等で訪問したり調査したりいたします。情報提供のほど、よろしくお願いします。



編集後記

NL第18号をお届けします。原稿をお寄せいただいた皆様、ご協力ありがとうございました。社会福祉教育に寄せる日頃の思いや所属校での取組みなど、間もなく開催される本学会の合宿形式大会で交流させることができると思います。

政治のドタバタは、私たちの生活の基盤を支える法案の審議にも影響しています。ご存知のとおり、生活保護法案や生活困窮者自立支援法案が廃案になりました。その一方で、教育と研究と実践をつなぐ重要性は今も昔も言われ続けています。例えば、来る7月15日(海の日)を基準日とした、ソーシャルワーカーデー2013が全国各地で開催されます。その統一テーマは「社会的・経済的平等の促進」であり、廃案となった法案に関する担当部局からの基調報告も予定されているようです。また、地域レベルにおいては、全国20府県でイベントが開催される予定となっています。人びとのHuman well-beingのために地元でネット! 広げませんか。

(編集委員 宮嶋)

